

## 8 月第 1 週の礼拝説教

■日 時：2024 年 8 月 4 日（日）10：30～11：30 聖霊降臨節第 12 主日礼拝  
（平和主日）礼拝

- 説 教： 保科けい子牧師
- 聖 書：新約：ヨハネの手紙一 5 章 1～5 節（P446）
- 説教題：「神から生まれた者」
- 讃美歌：149（わがたまたえよ、主なる神を。）  
561（平和を求めて 歩む民を）

8 月第一の主の日は日本基督教団のカレンダーでは、「平和聖日」として覚えられています。この日はまた、「平和記念日」あるいは「広島平和記念日」とも呼ばれています。昨年（2023 年）の 8 月第一の主の日は、8 月 6 日でしたので、まさに広島に原爆が投下された日と重なりました。そういうわけで、8 月 6 日は例年、朝の 8 時 15 分から記念の式典が行われています。今年もまた、恒久の平和を願う誓いがなされることと思います。

ところで私は、昨年、「平和聖日」が 8 月 6 日であったことから、久しぶりに大江健三郎の『ヒロシマノート』という作品を思い出しました。昨年（2023 年）の 8 月 6 日の主日礼拝でもそのことをお話したと思います。『ヒロシマノート』は 1965 年に岩波新書版で刊行されたノンフィクションです。1963 年 8 月、まだ 20 代の後半の青年であった大江健三郎は、世界初の原子爆弾が投下された広島市を訪れました。そして、イデオロギーの違いから原水爆禁止世界大会が流会した様子や原爆の被爆者、そして被爆者の治療に当たる医師たち取材しました。彼が見たものは、原爆投下十数年後のある日、突如として死の宣告を受ける被爆者たちの“悲惨と威厳”に満ちた姿でした。その一方で、いくつかの平和団体が声高に平和を叫ぶ喧噪の末に、重要な会議が開かれなくなってしまった事実を突きつけられています。そのような中で、ただ黙々と患者たちの苦しみに向き合う医師たちの姿に心を打たれた様子が記されています。私自身は、1990 年代の半ばに、この本についてのブックレビューを求められ書いたことを思い出しました。今は、私自身の原稿も形になった文章も手元に残っていないので曖昧なのですが、ネットで『ヒロシマノート』のブックレビューなどをいくつか読んで見ると、おそらく同じようなことを取り上げていたと思います。「人はイデオロギーでは救われぬ。著者の出会ったのは、原爆投下後 20 年近く経過した当時でも、被爆の後遺症で苦しむ続ける多くの人々と共に、日常の中で静かに歩み続ける広島を体現する人々であった。決して絶望せず、しかも決して過度の希望を持たず、いかなる状況においても屈服しないで、日々の仕事を忠実に続けている人々。その姿に、著者大江健三郎はもっとも正統的な原爆後の日本人を見、それらの人々と連帯したいと考えている。それが、当時の著者の見出した救いの方向性なのではないか。」その時、改めて『ヒロシマノート』という書物に出会った私は、そのことを契機にして、一人のキリスト者として社会にどのように向き合っていくか、ということ改めて考えさせられたことを覚えています。

さて、本日の聖書箇所であるヨハネの手紙一 5 章 1 節にまいりましょう。「イエスがメシアであると信じる人は皆、神から生まれた者です。」とあります。この言葉の書かれ

ている背景には、1世紀の最後のころに、ヨハネによる福音書を生み出したいわゆるヨハネの教会と呼ばれる人々がいます。ですから、ヨハネによる福音書の内容が前提になっているのです。この箇所は、ヨハネによる福音書1章12節13節と関連があります。「12 しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。13 この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。」と記されています。「イエスがメシアである」という箇所は、元の言葉では「イエスはキリストである」と記されています。キリストというのはギリシャ語なのですが、これをヘブライ語に置き換えますと、その言葉に相当するのが「メシア」です。メシアという言葉は「油注がれたもの」という意味で、ヘブライ人は「油注がれたもの」を「神様がお選びになった、私たちに救う救世主」と考えていました。ですから、これを踏まえて考えると、1節の書き出しは「イエスがわたしの救い主であると信じる人は」という意味になります。そのような人は、ヨハネによる福音書1章12節が語る、「言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々」に当てはまります。ここで「言」と表現されているのは、イエス様のことです。つまり、「イエス様は、自分を受け入れた人、その名である『イエス・キリスト』を信じる人々には神の子となる資格を与えた。」と記されているのです。しかし、そのように何気なく言い切られても、なぜ、イエス様がメシアであると信じる者は、神様から生まれた者なのか、信じたらどうして神様から生まれたことになるか、という疑問が残ります。1節の後半には「そして、生んでくださった方を愛する人は皆、その方から生まれた者をも愛します。」という飛躍したような表現が続いています。なぜ、著者ヨハネがこのように飛躍して語る事ができたかと考えますと、それは、この手紙が「ヨハネの教会」と呼ばれる群れに送られるものであるからです。ヨハネの教会に属する人々は、ヨハネによる福音書に記されているイエス様の言葉を元に、信仰を一つにしていました。そういうわけで、この手紙の背後にあるヨハネによる福音書が語っている言葉に慣れていたと思われるので、細かな説明をしなくとも共通認識ができる事柄であったと思われるのです。ですから、「生んでくださった方を愛する人は皆、その方から生まれた者をも愛します。」と語られていることが、自分たちの日常のこととして、「私たちが生んでくださった神様を愛する人はみな、お互いに神様から生まれた者同士として愛し合うことができるのです」と言い切ることができたのです。「キリスト教の教会の中で、お互いを兄弟姉妹と呼び合う根拠がここにあります。」と考える方もいるようです。しかし、今現在の私たちは、必ずしも当時の「ヨハネの教会」に属する人々と共通認識を持っているとは言えないので、あまり難しい言葉は使われていない文章なのに、意味が分かりにくいと思われるのです。

ところで、そのような当たり前のことを、なぜ著者はこの「ヨハネの教会」の人々にわざわざ手紙に書いて送ったのでしょうか。それはおそらく、「ヨハネの教会」の人々の中に「神様を信じて愛しています」と言っているのに、その同じ神様を信じる仲間を愛さない人たちがいたからです。そのような現実の矛盾した状態に対して、著者ヨハネはこの信仰の基本を語りかけたのでしょうか。私たちにも、目に見える形で信仰の仲間が与えられています。ですから私たちにも、その仲間を愛さないということは神様をも愛さないということにつながっている、ということを考えなさいと勧めているのです。では、信仰を同じくしていない人なら、愛さなくてもよいのかというと、そうではありません。神様が誰を愛し信仰を与えようとおられるのか、言い換えれば、私たちには誰が神様の子どもであるのか、ということとはわからないのです。しかし、それはこの世界のすべて

の人を愛しなさい、という漠然とした勧めではありません。「世界のすべての人々が平和でありますように」という祈りは、一見素晴らしいことのように感じられます。けれども、そこには私自身との関わりが見えてきません。2節から3節に「2このことから明らかのように、わたしたちが神を愛し、その掟を守るときはいつも、神の子供たちを愛します。3神を愛するとは、神の掟を守ることです。神の掟は難しいものではありません。」と記されています。ここに出てくる「掟」というのは、主イエスが最も重要な掟として二つにまとめてくださったものを指しています。「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」（ルカによる福音書10章27節）です。隣人というのは、自分が出会っている身近な一人一人です。その具体的な人々のことを愛しなさい、と主なる神様は言われているのです。主イエスがお架かりになった十字架になぞらえて、まず神様を愛すること（縦の関係）、そして隣人を愛すること（横の関係）、これが守らなければならない掟であることをいつも覚えておきたいと思います。

信仰が与えられる時、私たちの内に来てくださる方がおられます。それは、聖霊なる神様です。その聖霊なる神様の御支配に徹底して委ねていくときに、私たちの内に宿り給う聖霊なる神様が、その力をもって世に打ち勝ってくださいます。4節で「世に打ち勝つ勝利、それはわたしたちの信仰です。」と著者ヨハネは断言します。信仰とは、決して曖昧なものではなく「主イエスはわたしたちの救い主で、神の子である」という信仰です。同時にこれは、主イエスこそがすべてに対して勝利している勝利者であることも信じるということになります。主イエスはヨハネによる福音書16章33節で「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」と宣言されました。そのみ言葉こそ、いつの世にあっても、信仰者を生かし、そして今もなお、私たちを生かしてくださっています。そこにこそ、私たちが、黙々と、あきらめずに、根気よく、祈り続けていく確かな根拠が示されています。今日も共に祈りましょう。主なる神様、私たちの見聞きする様々な争いのただ中に、主にある平和が実現しますように、主イエス・キリストのみ名によって祈ります。